智慧の学校とアディヤール

ラーダ・バーニア(※) 国際会長

 (※)ラーダ・バーニア（1923-2013）は、神智学協会の第7代国際会長。

1. 智慧の学校 (1990年2月)

智慧の学校は、アディヤールでの重要な活動の一つであり、この場所にとってだけでなく、神智学協会の活動全体にも重要なものです。表面的なレベル、表面的な興味にとどまっている協会のメンバーは、協会の目的を遂行する上で有力であるはずがありません。したがって智慧の学校は、生徒が自分自身の中の深みに到達するのを助けようとしています。それは、単に個人的な満足を提供し、生徒の勉強を進歩させることを目的としているのではなく、より大きな目的があるのです。私たちの国際本部であるアディヤールは、その美しさ、歴史、伝統、雰囲気からして唯一無二の場所であり、正しい目的と開かれた心を持って来た人に、高揚した体験を提供します。智慧の学校にとって、アディヤールほど素晴らしい環境はないでしょう。

　このテーマは以前にも取り上げられたことがあるかもしれませんが、智慧の学校の各セッションの始めに、生徒たちが智慧の本質とそれに至る道について考えることは意義があると思います。知識は、それなりの知性のある人なら、多くの本があり、簡単に手に入れることができます。人々は神智学のさまざまな面について語りますが、それでも古代の智慧の真理が彼らの心に浸透して彼らを変容させることはありません。智慧とは変容なのです。

　ニールス・ボーア（訳注：デンマークの理論物理学者）は、学生たちに「私が発するすべての文章は、君たちにとって主張ではなく質問とみなすべきだ」と言って講義を始めたと言われています。霊的な探求者にとっても、これは進むべき道です。ブラヴァツキー夫人が神智学の秘教部門を始めたとき、学徒たちに、自分の質問に答えるために自分のところに来てはいけないと言った。できるだけ自分自身で答えを見つけてから、彼女のところに聞きに来るようにとアドバイスしていました。これはクリシュナムルティも推奨していたことで、彼は「正しい質問の仕方を知っている人は、自分自身で答えを見つけることができる」と述べています。正しい質問、つまり深い意味を持つ質問をするためには、その人の話をよく聞いて、さらによく考えなければならないのです。インドの伝統によれば、耳を傾けること、そして耳を傾けたことについて深く考えることを学ばなければ、瞑想はできません。深く考えるということは、「なぜそうなのだろう？ その意味は何なのか？ 私はどのような根本的な側面を見逃しているのだろうか？」と問うことを含みます。このような探求を何度も行わなければなりません。それは井戸を掘るようなもので、深く深く、無関係なもの、役に立たないものをすべて心から取り除き、生命を与えるポイント、つまり正しい質問が発せられ、正しい答えが解放される明晰な状態に至るのです。

　智慧の学校は、生徒が自分自身の内なる資源を活用できるような雰囲気を作り出すことを目的としています。自分の意識は真理の床であり、計り知れない資源がそれぞれの中に眠っています。しかし、真理の源に到達するためには自分の意識の中に十分に深く入っていかなければなりません。指導者や講演者は、生徒が自分自身の力を引き出し、自分自身で意味を発見するのを助けるためだけに存在するのです。それが智慧の基本です。知識というものは、どこで何が語られたかを記憶すること、あるいは情報を組み合わせてパッチワークを作ることにしかなりません。

　知識は人を停滞させ、不毛にし、あるいはさまざまな愚行を生み出します。しかし、智慧は変容と同義です。

　聖書には「智慧はルビーよりも尊い」とあります。

　　智慧は世界の端から端まで届き、力強く、甘美に、万物を秩序づける。

智慧はシャロン（平野）のバラであり、谷間の命である。

智慧は美しい愛の母であり、忍耐と辛抱と聖なる希望の母である。

智慧があれば、私たちの生活全体が変わり、私たちが接するすべてのものに癒しと救いの手を差し伸べることができるのです。賢者は弟子を探す必要はありません。弟子を集めるために多大な努力をしたり、広告を出したりする人は、賢者ではありません。賢者とは、蜂が蜜に寄ってくるように、人々が自然に集まってくる人のことです。智慧とは、尊厳と美と光に満ちた領域への変容であり、その光の中へと自然に他者を引き寄せるものなのです。

　智慧を見つけるには、調和も必要です。アディヤールのような場所の雰囲気、このアーシュラマの美しさと平和は、生徒が生まれながらに持っている調和を高め、強化するものです。調和とは、単に外見的なレベルで仲間になることではなく、心の奥底で平和を体験することです。ブラヴァツキー夫人は『実践オカルティズム』の中でこう言っています。

　「学習者たちの間に最高の調和が支配しない限り、成功はありえない！……。真理を受けるに適した有望なチェラたちが、その気質と仲間との調和がとれないために、何年も待たなければならなかったことは知られている」。

　仲間の学徒は、片手の指のように、ハープの弦のように微調整されていなければなりません。この相互の調和は、それぞれが個人的に発見できる以上のものを共同で発見するための手段です。学徒のグループがお互いに調和していると、一人一人の心が広がり、グループの統一された心は、個人の心よりも純粋な真理の水路となります。このように、智慧を求める人は、お互いに、また周囲の環境と常に調和を保つように努めなければなりません。

　調和と幸福、愛と静けさ（平和）といった経験は、異なるレベルで知られています。調和、平和、愛を深く実感することは、すべての人や物の中にある深い本質を発見することに等しいのです。心の関係や物理的関係ではなく、魂の関係があるところでは、エーテルは深い調和やシャーンティ（平静）の感覚を持っています。母親と子供は、時にそういう関係を本能的に知っています。母親の愛が賞賛されるのは、その中に無私の要素があるからです。母親は子供の魂に触れているので、子供が感じていない場合でも、本当の心配を知っているのです。だから、子供が自分にしてしまう悪いことも、優しく見過ごすことができます。精神的なレベルでもなく、愛着や感傷といった感情的なレベルでもない魂の関係こそが、共に学び、共に働く生徒たちをつなぐものでなければならないのです。東洋の伝統では、霊的な師匠の弟子たちは、血のつながった兄弟や姉妹よりも近いと言われています。ですから「智慧の学校」では、調和の法則に縛られながら、耳を傾け、深く考え、問いかけるという雰囲気の中で成長していくのです。

2.智慧の学校（1991年11月）

智慧の学校は、国際本部で最も重要な活動の一つです。なぜなら、単なる協会の登録会員ではなく、真のセオソフィストであるということは、「智慧」の探求に身を投じることを意味するからです。智慧は、単に言葉や概念、あるいは多くの読書によって見出されるものではありません。なぜなら、単なる協会の登録会員ではなく、真のセオソフィストであることは、「智慧」の探求に身を投じることを意味するからです。智慧は、単に言葉や概念、あるいは多くの読書によって見出されるものではありません。同胞愛について話したり、知的な用語で議論したりすることは、それを生きることとは全く違います。後者だけが智慧につながるのです。智慧は、生きとし生けるものに害を与えないこと、愚かなやり方ではなく、最善の方法で他人の積極的な助けになることなど、多くのことを意味します。同胞愛もまた、多くのことを暗示しています。時々、私たちは神智学協会の最初の目的を気軽に受け取る傾向がありますが、実は非常に深い意味を持っています。それは、賢明な人と普通の人との間のすべての違いを生む、大きな心の変化を意味しています。智慧は、生命の不可分の認識から生まれる同胞愛を実践することを可能にし、一方、同胞愛を生きるための真剣な努力は智慧につながります。この２つは、神智学の仕事の相補的な側面です。

　智慧の学校は、智慧を大切にする人たちを集めようとする大切な学校です。それがなければ、神智学協会のために働いていると想像しても、意味がないのです。そのような仕事には力がありません。これは、同胞愛が表面的な目的としてのみ存在するロッジの弱点の一つです。一方、真理を真摯に求める同胞愛の中心であるロッジには、善のためのダイナミックなパワーが存在するのです。智慧の学校の授業は、単に思想の収集のためにあるのではありません。それは書物によっても同様に行うことができます。この学校では生徒たちは、ただ情報を蓄積したり、誰かが言ったことを覚えたりするだけであってはならないのです。どんなに賢い人でも、他人に智慧を授けることはできないのです。できることは、自分の努力で智慧という貴重な宝石を発掘しようとする覚悟と熱意を持った人を励ますことだけです。

　智慧を得ることで、私たちは違う世界を創造します。「創造性」というと、一般的にはモノを作ったり、音楽を奏でたりすることを連想します。しかし本当の創造性とは、言い表すことができないものです。美は形や言葉の中にあるのではなく、言葉のない意識こそが創造的であり、それは言葉や歌、あるいは単なる沈黙で表現されることがあると、ある哲学者は指摘しています。その意識の質は、「智慧」の質でもあるのです。この意識こそが、高貴な世界、争いや痛みのない世界、真の調和のとれた世界、人類の真の進化が始まる世界を創造することができるのです。

　今のこのままでは、人類の進化が始まったとは言い難いです。なぜなら、動物的な性質が終焉を迎えていないからです。人間の活動は今や、ほとんどが悟りのない心に扇動された動物的な性質です。スラム街や路上で暮らす人々を除けば、人間は自分を「保存」（維持preserve）する必要はありません。しかし人々は他者より優位に立ちたい、出世したい、所有したい、戦いたい、支配したいという衝動に盲目的に駆られているのです。私たちが知っている世界は、人間の脳によって悪化した動物の活動によって支配されているのです。人間の進化は、このような盲目的で制御不能な衝動に駆られてはならないことを理解し始めたときに始まります。そして、これが智慧の始まりです。

　神智学は、すべての普通の人間がどのようにして自分自身を完成させ、情熱や強迫観念から自由になることができるかを教えています。智慧はこの方向に進むことにあり、それが人間の進化です。そうでなければ、それは精神的な進化、つまり、動物でさえ初歩的な形で持っている思考能力の発達に過ぎません。もし私たちがこのすべてを探求し、真理を私たちの意識にいっぱいにさせなければ、空論にとどまり、私たちにも社会にも何の変化もないのです。智慧の学校での活動は、生徒一人ひとりにとって「道を切り開く」ものでなければなりません。

3. 智慧の学校（2005年6月）

　1922年に、哲学、宗教、科学、文学、芸術のあらゆる側面をダイナミックに統合したプログラムを展開する学校をアディヤールに設立することが提案されました。アニー・ベサントは、人間のすべての活動は「一つの生命」の進化した表現であるという中心的な原則に基づいて活動するよう指示しました。各国から集まった生徒たちは、これらのテーマについて熟練した人の話を聞き、アディヤール図書館で学び、論文を投稿し、議論に参加する機会を持つことになりました。この学校は「ブラフマヴィディヤー・アーシュラマ」と呼ばれ、「智慧の学校」とほぼ同じ意味ですが、「アーシュラマ」という言葉は生徒が原則としてアディヤールに居住することを示唆しています。1926年に開校したこの学校は、知識を求め、簡素な生活を送る覚悟のある教養ある若者たちが、世界中のTS（神智学協会）の支部から集まってくることを期待していました。このプログラムはしばらくの間、成功裏に進行しましたが、その後、落ち込みました。

　1926年には、協会のドイツ支部書記長のアクセル・フォン・フィーリッツ＝コニール氏が、1921年にドイツのダルムシュタットでラビンドラナート・タゴールの出席のもとに行った智慧の学校について、ヘルマン・カイザーリング伯爵の通訳でレポートを発表したことも”The Theosophist”誌に掲載されています。講演の効果は絶大で、初めて会った多くの人がすぐに魂の親近感を覚えたといいます。そして、「智慧の学校」がドイツの精神的な生活にとって何を意味するのか理解できないほどだったそうです。カイザーリング伯爵（訳注：ドイツの哲学者・社会学者）は、「私は自分のために弟子の集団を教育するつもりはありません。それどころか、私の願いは一人ひとりが自分自身の指導者、案内人となるように訓練することです」と宣言しました。

今日のアディヤールの智慧の学校は、上記の努力を引き継ぎ、当時のTS（神智学協会）会長C・ジナラージャダーサ氏の指導のもとに復興されたものです。アニー・ベサントは、この1926年のスクールについて語るとき、今日でも通用するさまざまな指摘をしました。まず第一に彼女は、これから行われる研究の目的を明らかにしました。生徒たちは何を求めていたのでしょうか。その答えは、学校の名前そのものが示唆しています。智慧は、永遠を求め、神の計画を垣間見る者にもたらされます。智慧は、顕現のプロセスを通じて「神性の展開の全領域を照らし出す」からです。“At the Feet of the Master“（『大師のみ足のもとに』）で語られているように、「ひとたび人がそれを見て、本当にそれを知るとき、人はそのために働き、それと自分を一体化せずにはいられません。それはとても輝かしく、とても美しいからです」。

一見、脈絡がなく断片的に見える現象や出来事も、「永遠」の光の中だけで、真に理解することができるのです。しかし、神の計画は有限の心では分析も評価もできないので、自らの周辺から脱却しなければなりません。ベサント博士は、教えることのできるすべての知識は、心や知性を媒介にして学ぶ、より劣る（lesser）知識、すなわちアパラー・ヴィディヤーであるという古代の教えに注意を促しました。教師はこのレベルにおいて役割を果たすことができます。高次の知識（パラー・ヴィディヤー）は、低次の知識の分野を照らす光です。これは教えることはできず、知識が、献身の徳に含まれる分離した自己の放棄と結びついたときにのみ獲得されます。そうすれば、光は内側から放たれるのです。

智慧を志す学生は、外からではなく、内から見る才能を養う必要があります。これは、内側から見る高次の能力を発達させることを意味し、そのため直観、洞察、ブッディと呼ばれます。普通の心は、人生のすべての動きを「物」として外から見ているため、一見不和な要素を統合し、統一体の中で調和させるために必要な理解が欠けているのです。神智学では、個人レベルでも高いレベルでも、生命の力は内側から外側へ働くと宣言しています。すべての外側の行動は、内側の条件に根ざしているのです。智慧の学校での研究は、内側と外側、多数と「一者」（神 “the One”)との深い関係を認識する直感的な認識の潜在的な能力を刺激することを目的とすべきです。

　智慧の学校は、知性（マインド）と（ハート）の最高の資質を兼ね備えた、何世代にもわたる神智学の伝達者が生まれる苗床となることを意図しています。そして、伝達者たちは世界の尊敬、あるいは少なくとも注目を浴びることになるのです。そのようなメッセンジャーたちは、オープンマインドに恵まれているので、いかなる論争も避け、ただ自分たちが理解していることを、知的な男女がさらに議論を深めるための基礎として提示するだけでしょう。

　この学校を卒業した生徒たちは、自分の住んでいる地域やロッジにも同じようなミニスクールを作るように勧められました。このような広がりは、ある程度は実現されています。ヨーロッパ連盟は、オランダのナールデンのセオソフィカル・センターで「智慧の学校」を開催しています。西アフリカ支部も、ガーナのアクラでミニ「智慧の学校」を行っています。カリフォルニアのクロトナと、オーストラリアのスプリングブルックセンターには、神智学（別の言葉で、智慧）の学校があります。地理的には離れていても、その目的と学問へのアプローチを共有することで、精神的に統合することができるのです。内と外を関連づける直感的な知覚の刺激、永遠の領域への開放性から糧を得る統合の中で現世の出来事を受け入れる視点、知識と献身を融合させ、論争を起こすのではなく、探究心と内からの光明を見出す能力を呼び起こそうとするエネルギーの伝達、これらは共通の目的です。

4. このアディヤールの地（2002年3月）

　H・P・ブラヴァツキーとH・S・オルコットがアディヤールに来て発見し、記述した楽園は、当時マドラス市（現チェンナイ市）の一部ではなかったのです。チェンナイの中心部、イギリス人が「ジョージタウン」と名付けた混雑した地域は、アディヤールから北に７マイルほど離れたところです。アディヤール川の北側には、ベンガル湾に面した静かな河口があり、その間に、空き地、小さな湖、果樹園、庭が点在し、とても広々とした楽しい村という感じでした。創立者たちは、アディヤール川の南岸に27エーカーの土地を購入し、海と河口の素晴らしい景色を眺めながら、朝夕の静寂の中で、太陽と月が華麗に昇り、沈んでいきました。車も電話も電気も、人を引きつけ、喧騒を生み、パラダイスを純粋に保つことを妨げるような、人間の存在を主張するような近代的な設備はありませんでした。

　1907年、H・S・オルコットの後にアニー・ベサントが会長に就任すると、アディヤール本部の敷地の一部である東と南の土地（ガジュマルの木やその他の自然の宝庫）をすべて協会のために取得しました。この拡張により、神智学協会は海に面し、その落ち着いた雰囲気と磁気の質を守るための空間を手に入れたのです。今日、チェンナイという成長著しい大都市に包まれ、交通騒音や拡声器の音で散在していますが、そのパラダイスは、神秘的な魅力を適切に保っているのです。

　このキャンパスは、チェンナイ市民の健康と文化遺産の維持に重要な役割を担っているのです。チェンナイ（マドラス）は、環境上重要な貴重な緑の肺として機能しているのです。その自然な木陰は、無差別な揚水や貧弱な都市計画によって枯渇の危機に瀕している水位を維持し、涵養（かんよう）するのに役立っています。私たちのオアシスの外にある大気汚染は危険なレベルに達しており、魅力的な古いマドラスを、温度パターンや降雨量に悲惨な変化をもたらし、地球の美しさを損なっている他の多くの制御不能な都市付加物の毒に似せて変えようとしているのです。

　研究者たちは、私たちのキャンパスに、多くの外来種を含む400種以上の植物を記録しています。また、多様な哺乳類、爬虫類、鳥類、昆虫が、居住者や世界中から本社の神聖さを体験しに来る会員たちと平和に調和して暮らしています。敷地内は鳥たちの楽園でもあります。敷地内やその周辺では、約200種類の鳥が確認されており、餌を食べたり、巣を作ったり、移動のために訪れたりしています。数十年前、神智学協会の地所に隣接するアディヤール河口と島々は、政府によって、捕獲、罠、射撃、卵の持ち去りさえ許されない聖域とされました。マドラス政府は神智学協会に、密猟者やジプシーなどの無知で破壊的な集団から、私たちの地所周辺の動物の生態を保護する特権を授けたのです。これは、すべての生命をひとつとみなし、すべて等しく神聖であり、敬意を払うに値するとする私たちの哲学と調和するものであり、私たちはこの責任を可能な限り果たすことを喜んでいます。

　The Theosophist誌の表紙には、キャンパスを美しく彩る精緻な植物や花のいくつかを表示してきました。さらに最近では、この地所に歌や色彩、魅力をもたらしてくれる愛らしい鳥たちを写真に収め、紹介しています。これらの写真から、物質的な美しさだけでなく、精神的な自然の力、そして自然を支えている力の美しさも感じていただけると思います。自然は神の衣であり、ウパニシャッドが「あれ」（That）と呼び、クリシュナムルティが「向こう側」（Other）と呼ぶ不可視のものの、最も外側にある衣であると言われています。ヒマワリが太陽の光に目を向けるように、私たちが「あれ」に目を向けるとき、ひょっとすると幻想は消え去り、私たちの心に光が射し始めるかもしれません。私たちのアディヤールの地所には、何千人もの人々が放棄と尊敬の念を抱いて集まってくる場所特有の、高揚した雰囲気があります。

5. アディヤールでの大会（2005年2月）

　アディヤールでの国際大会は歴史的な行事であり、初期には創立者のオルコット大佐が主宰し、その後、歴代の総裁が主宰してきました。この大会は、神智学協会の他のどの大会よりも、はるかに多くの会員を世界各地から集め続けています。1925年と1975年には、その数は2,000人を超えました。

　会員たちは、移動、相部屋、食事など不便な思いをしながらも、このイベントのために毎年アディヤに集まってくるのです。アディヤール大会の魅力の本質を本人が意識していなくても、国際本部の美しいキャンパスに漂う独特の雰囲気は、人々が感じる強い磁石のようなものです。その魅力は、単に講演や行事、世界的な人脈、木々や低木の美しさだけでなく、無形の何かが参加者の心を動かし、高揚させるのである。そして、N・スリ・ラム前会長が言ったように、「神智学の本質をより多く」理解し、普遍的な同胞愛と利他的な生き方への献身をより深く実感することができるのです。

　1882年に書かれたオルコット大佐の日記には、「私たちはアディヤールに来ることとなり、一目見て将来の家が見つかったと思った」と書かれています。本館は急速に改築され、HPBは１階の大きな部屋１つを占有し、その隣には「屋根」と呼ばれるオープンテラスの下で人々がしばしば座っていました。そこは夏でも心地よい風が吹く場所でした。大佐はその時の気持ちをこのように雄弁に語ってくれました。「私は多くの国を訪れたが、あのテラスから見る景色ほど美しいものはない。昼でも、星明かりでも、月明かりでも」。アディヤールの美しさは、今は姿を変えながらも、創立者たちが一目見てここが自分たちの故郷になると思ったときと同じように、会員や訪問者を魅了しているのです。

　“Old Diary“（オルコット大佐 著）のページなどには、協会創設の立役者であるマハートマたちがアディヤールを祝福したときのことが書かれています。多くの熱心な会員たちが、アディヤールでは他の場所よりも高貴な考えを持ち、深い洞察力を得ることができるということを知り続けています。彼らの愛と献身、犠牲と奉仕の精神は、アディヤールの無形の雰囲気を常に強化し、受容する人々の霊的本能を養っているのです。

　今年の大会は、南インドの東海岸を津波が襲い、アディヤール川を水が遡上（そじょう）し、瓦礫を残しながらも破壊されない状態で始まりました。近隣のコミュニティへの救援活動が計画される中、大会は平穏な雰囲気に包まれました。アディヤール本部は守られており、今後も安全であり続けるでしょう。普遍的な同胞愛を促進するための献身的な精神と、智慧への無私の探求が、会員の生活と仕事の中心である限りは。

　釈尊の「自分自身の灯火となれ」という教えには、パーリ語の灯火（dipa）とも島（dvipa）ともとれる単語が含まれています。（訳注：『沈黙の声』断片Ⅲを参照）後者の場合、外側の出来事に揺るがない深い内面の安定を指しており、海の中の島の状態に喩えて描かれています。霊的な意識は、万物との普遍的な愛の関係、つまり内なる不滅の要素（element）であるアートマに根ざしているので、常に揺らぐことがないのです。そうすれば、世俗の引力や外界の「災い」の影響に心を乱されることはありません。このような、揺らぐことのないランプの水の中の島は、現象界とその出来事が影のようにしか実在しないことを知っている「意図を超えた心」（mind beyond mint）の象徴です。アディヤール大会に参加する会員は、時にこの内なる平和と安心に触れ、時を超えた世界と触れ合う深い喜びを体験します。

　意識がより高いレベルの平和、善、調和に到達するたびに、本人が意識するかしないかにかかわらず、何らかの変化が起こります。意識はより細かい波動に反応し始め、何の抵抗もしなくなり、最後にはより粗い波動はもう入ってこられなくなるのです。古代サンスクリット語の一節にあるように、「神と接触する者は、現在の状態がどうであれ、内も外も清らかになる」のです。

6.大会の意図（1985年6月）

　国際大会の最後（1984年12月31日）に次のように話しました。

　私は今朝、この大会を正式に閉会しますが、精神的には一時中断するだけです。それは、私たちだけでなく、私たちが再び出会うまで、接するすべての人に有益となる贈り物を、常に持ち歩くべきであるということを意味しています。讃美歌の一節に「神は再び会うまであなたとともに」というのがあります。「神」とは、この上なく善良で、清く、情け深いものです。私たちが再び出会うまで、それが本当に私たちとともにありますように。もしそうであれば、私たちはこの大会に参加したことで多大な利益を得たことになり、どこにいようとも、本会のための仕事を高貴な活動にすることができるはずです。

　人生は多様で、変化に富んでいます。一本の木が一粒の種から成長し、多くの枝と無数の葉に成長します。しかし、根から樹冠までが一本の木なのです。枝分かれしても、離れ離れに分かれることはなく、どの部分にも同じ樹液が流れています。

　それでも、生命の樹液がすべての生き物を貫き、栄養を与え、全体を一つにまとめています。このことに気づいた人は、特定の人にだけではない尊敬と共感の精神に包まれます。その尊敬の念は、人間にも、あらゆる生命体にも、自分を取り囲む大地や空気にも向けられます。その時、その人は普遍的な言葉を話し、たとえ彼らの言語で話せなくても、すべての人々とコミュニケーションをとることができるのです。ハートとハート、マインドとマインド、存在と存在との間には、そのハートとマインドに尊敬の念があるとき、交感があるのです。これが神智学の本質です。

　よく知られている念仏に、ダンマ、サラナンガッチャーミという言葉があります。ダルマやダンマという言葉は、特に、目に見えないところで存在するものすべてを結びつけている「善法」を指しています。より深いレベルでは、すべてが結びついていますが、外側のレベルでは、分離しているように見えます。一見分離しているように見えるものが、「一つ」に根ざしていることがわかると、「法則」が理解できるのです。その法則に気づき、それに帰依する人は、共感と尊敬の念で溢れずにはいられません。

　学びにはいろいろな形があります。あるものは、頭脳だけに関係するもので、人を冷たく不毛にします。しかし、宇宙の真理を学ぶ者は輝きに満ち、その人生は与えるものであって、奪い、所有するものではないのです。

　与える者は最もよく受け、少ししか求めない者は最もよく得るのです。これは世俗的な意味でもそうです。ある人は、他の人が自分に対して特定の方法で行動することを要求することによって、尊敬を得ようとします。しかし本当の尊敬を得る人は、要求する人ではなく、自分自身が幸せで良い人であり、外からお願いする必要のない人なのです。私たちの前会長であるN・スリ・ラムが誰からも愛されたのは、彼が自分を高く評価していたからではなく、謙虚さと自尊心を捨て去る智慧の精神を体現していたからなのです。尊敬は、彼が求めなかったからこそ、もたらされたのです。どんな人でも、しつこくしたり、攻撃的になったり、要求したりせず、愛と同情心と配慮をもって他人を思いやることを学べば、多くのものを受け取ることができるのです。

　部屋やバスルームを共有しなければならない、騒音がある、慣れない料理を出されるなど、大会には物理的に不便なことが多いのですが、それがどうしたというのでしょう。そんなことはどうでもいいのです。少なくともしばらくの間、その不便さを忘れて、平穏に、他人や仕事を受け入れ、思いやることができないでしょうか。これは貴重な訓練です。人生には、「エクセレンスを中断し」て、快適さ、自己の過大視、自己意見の過大評価への欲求を放棄し、新しい心の質を体験することを学ぶための機会がたくさんあるのです。

　神智学的であるということは、すべてのものが他のすべてのものと密接に、本質的に関係しているという偉大な法則に従って行動することです。このことを学ばずに、どうして神智学を教えることができるでしょうか。私たちは学ぶために大会に参加しているのであって、その学びを終わらせてはなりません。大会の精神は受け継がれ、そのインスピレーションは残り、私たち全員に異なる方法で生きることを教え、新しい世界を創造する手助けをするのです。

7.アディヤールの神智学協会本部 （1982年12月）

　アディヤールにある神智学協会の本部は、これまで、そして今もたくさんの人々にとって多くのものであります。平和の場所であり、自分の心の中にある「聖域」への巡礼を行う人々の宿となる神聖な中心地であり、心が作り出す障壁を越えた友情の生きた象徴であり、自然が敏感な人々に秘密を明かしてくれる庭園であり庵なのです。哲学や宗教の伝承を学ぶ人々の集会場であり、成長過程にある子供たちの楽園、その他多くのものです。オルコット大佐はアディヤールについて、「どんな大きな協会も、我々より優れた本部を求めることはできないだろう……。HPBと私が初めてこの建物を見たとき、彼女は感激に満ち、それへの愛情は最後まで続いた」と書いています。

　何世代にもわたって会員が注いできた愛情と、その範囲内で行われてきた仕事は、何千人もの訪問者や通りすがりの人たちでさえも感じる、質の高い美しさと高揚感を持つようになったのです。約100年前、H・S・オルコットは、アディヤールが「協会の創立者とその仲間たちの崇高な志の強い核」になったと記しています。今日、その志の核は、100年にわたり世界中の会員が与えてくれたものによって、より強く、より大きく、放射状に広がっているのです。

　アディヤールは主に仕事の場です。その静謐な雰囲気は、オルコット大佐の言葉を借りれば「西洋の都市の喧騒の中でいつも神経をすり減らしてきた者には、狂おしいほどである」。しかし、この静かな外観の下で、仕事は、水面が静止して見える川の強い流れのように流れているのです。

　物質主義的な条件付けをされた心にとって、仕事とは、外界の喧騒、イベントの企画、宣伝のしかけ、人々の動きと同義語です。神智学の観点からは、仕事とは、心を曖昧さから解放し、道徳的な認識と精神的な洞察の状態に（心を）引き上げることを意味します。海辺や川辺、図書館や勉強会などでの静かな内省と思索の時間は、注目を集めやすいが人間の心の状態に変化をもたらさない華やかな活動形態よりも、多くのことを達成できるかもしれません。

　アディヤールの役割は、人間の精神的再生をもたらすという神智学協会の基本的な目的と当然ながら密接に結びついています。人間関係や人間社会の巨大な問題は、一般に無視されたり隠されたりしている矛盾に満ちた戦場である人間の心にその起源があります。神智学協会は、人間社会に根本的な変化をもたらし、争いと疑惑の代わりに、調和と理解の関係を確立することを目的としています。これは、人々が自分自身の心に何が起こっているのか、そして心の状態が外側の出来事や緊張にどのように反映されているかを正直に見始める場合にのみ可能なことです。

　したがって神智学協会の活動は、自己認識と存在の法則の知識につながる生き方を含んでいるのです。人間は、目に見える世界と目に見えない世界のすべてのものに浸透し、規制している不変で不易な法則に従って行動し、考え、感じ、「ある」ようになったときに初めて、その精神は隠れた深みから霊的エネルギーを流れ込ませることができるようになるのです。個人の再生も、調和と自由と創造性が花開くような人間社会の再編成も、正しい生き方を発見することにかかっています。

　古代のアーシュラマは、一般に聖なる賢者によって導かれていました。彼らの存在と影響力は、単に教えを伝えるだけでなく、異なる生き方が可能であることを確信させてくれました。アディヤールの役割は、そのような生き方を育むことです。

　世俗の流れは概してどこでも強いので、ほとんどの人の心の中には疑念が潜んでいます。一方では、人々は平和で幸福な世界を作るためには態度、考え方、人間関係を変えることが必要であるということを受け入れますが、他方では利己主義は安全のために必要であり、野心と世俗の規範やパターンを採用しなければ、前に進むための闘いに沈んでしまうという気持ちがあるのです。ほとんどの人は、活動や日常生活に拍車をかけるエネルギーは、野心以外には考えられません。思考が発する長年の条件付け（サムスカーラ）は、野心、つまり攻撃的でないものを、生きること、進歩することと同一視しています。利己主義（野心は本質的に利己的であるため）は、全体的にまともで親切な、平均的な人間や、霊的な生活を送ろうとする人たちの背景にある哲学です。『道の光』は、野心のような特質は「微妙な変化を経て、弟子の心の中に姿を変えて再び現れる」ことがあると指摘しています。利己主義や野心という背景は、それなくして自分の未来があるのかという疑念と、それがなくなるとともにすべてのエネルギーが衰退してしまうという恐怖がある限り、根絶されることはないのです。

　アディヤールは、真のアーシュラマであることを証明しました。なぜなら、アディヤールには常に、疑念と恐怖を払拭する存在、手本、指導が存在したからです。その雰囲気は、平和と自由の実現に近づくための個人の内なる動きを安定させます。永遠の雰囲気には、その静寂の中に何かがあるのです。ここでは、利己的な衝動や個人的な野心を一掃する思考のレベルで生きることの意味を、他の多くの場所よりも容易に理解することができるのです。

　アディヤールが神智学協会の世界本部として機能していることは、精神生活の中心としての役割と切り離せず一体です。誠意と深みのない人が話す言葉や講演が平板で感動を与えないように、協会本部から発信される推進力とインスピレーションも、その中心が内なるエネルギーで満たされていなければ、薄れてしまうでしょう。アディヤールは、単なる管理施設ではなく、協会の磁力と生命力の中心であり、世界中の組織を常に浄化し、補充することを意味しているのです。

　アディヤールの仕事は、そこに短期間あるいは長期間に渡って住むという大きな特権を持つ一部の人たちだけでなく、アディヤールを心に刻み、その役割を自覚するすべての会員によって成し遂げられるものなのです。100年もの間、物質的には見たことがなくても、内的に知っていて、その一部となっている膨大な数の会員によって、大切にされ、支えられてきたのです。このことは、遠く離れた場所に住む、会ったことも見たこともない男女が、共通の利益と共通の大義によって心と心を一つにする時代を予感させるからです。このような内なる結束は、人間関係におけるあらゆる障害を克服し、テニソンが歌った世界の連盟のための強力な基盤となるでしょう。

　制限された、あるいは宗派的な目的を持った仲間に入ることは比較的容易です。国家的、人種的、宗教的、共同体的利益への愛着は、分裂的であるため、同様に有害な大義への情熱によって上書き（無効に）されることがあります。神智学協会の魅力とその精神的な中心（霊的なハート）は、エゴイズムを消し去り、人々を統一する、分断のない普遍性という断ち切れない建設的な結びつきにあります

8.アディヤールの100周年記念（1982年2月）

　1982年の年頭に当たり、この地に本部を構えて100周年ということで、世界中の会員がアディヤールに思いを馳せていることでしょう。年末の大会は、海外からの参加者も多く、盛大なものになりそうです。

　オルコット大佐は『古い日記』の中で、恒久的な本部をいろいろな場所で探したことを語っています。美しい環境の中にある大きなバンガローなど、多くの物件が彼とHPBに紹介されましたが、おそらくどの物件も霊的な雰囲気が合わなかったのでしょう。ようやくマドラスに来たとき、誰かがハドルストン・ガーデン（当時はこう呼ばれていました）のことを話しました。そして、「一目見ただけで、将来の住処が見つかったと思った」と言っています。

　残念ながら、インド国外には、そしておそらくインド国内にも、「本部をどこかへ移す」ということを軽々しく口にする人が一定数います。ストライキがあったとか，３、４年前に財政難になったからというのは，移転を考える十分な理由にはならないのです。アニー・ベサントが会長をしていた1931年に１番早く労働問題が起こりましたが、そのときにアディヤールを捨てようと思ったことは１度もありません。アディヤールには、浮き沈みがあります。HPBがまだここにいたころは、クーロン事件など多くの嵐が吹き荒れ、HPBと協会に対する悪評があちこちで聞かれたものでした。地球上に、困難のない場所などありません。実際、ある場所が霊的な影響の焦点になると、必ず対抗勢力が現れるものです。障害があるからといって、仕事を放棄する理由にはならないし、仕事をする場所のせいでもないのです。だから、「アディヤールに問題がある」と言うのは、ごく表面的な見方でしかないのです。問題のない国などありますか？ だから、それは本部の終わりなのです。

　何よりもまず、本部を別の場所に移すことは現実的ではないと思います。しかし、それは些細な理由です。本当の理由は、オルコット大佐の言葉の中にあります。彼は偉大な旅行者でした。アメリカでもヨーロッパでも日本でも、美しい場所を訪れましたが、このアディヤールのような場所は一つもないと言っていました。おそらく今でもそうなのでしょう。精神的な影響力において、アディヤールに匹敵するようなアーシュラマはないと私は思います。アディヤールは、多くの献身的な労働者の生活と労働によって神聖化された場所です。神智学協会の歴史を読むと、初期の頃はほとんどインドに限定され、アディヤールを中心に活動していたのですが、ここで起こった出来事に深い感動を覚えずにはいられません。アディヤールは今でも当時と同じ精神的な中心地であり、同じ原理と理念を掲げています。アディヤールは、単に神智学協会の本部というだけではありません。ベサント博士の部屋の外に板があり、そこには「マスター（大師）たちの家であるアディヤールのために働こう」と書かれています。マスターたちの家というのは、何か物質的なものという意味ではありません。アディヤールはマスターたちの影響力の拠点であり、そこからマスターたちの輝きが広がっていく場所でなければならない、という意味です。

　アディヤールは、人々がさまざまな目的のために協力したりしなかったりするような、普通のコミュニティではありません。アディヤールのような場所に住む人たちは、もし本当にアディヤールを作り、あるべき姿に維持しようとするならば、自分たちのために利益を得るのではなく、アディヤールの内なる精神的な豊かさに貢献する、与えるという精神を持たなければならないのです。すべての人が、自分自身の何かを与えるためにそこにいなければならないのです。

　美しさは、すべてのアーシュラマが備えるべき資質のひとつであり、建物の美しさも自然の美しさも、同じです。私たちは単に通過可能なものに満足してはなりません。すべてが最高のものでなければなりません。豪華なものでなく、最高のもの、最も美しいものでなければなりません。もし、ここが本当にマスターたちの家であるならば、常にこのようであるべきではないでしょうか。

　『マハートマ・レターズ』には、「高次の影響は、平静な心を通じてのみもたらされる」という趣旨の記述があります。もし、アディヤールが霊的な影響の経路（チャンネル）になるのであれば、そこに住む人々は平穏な生活を送ることによって、桃源郷のような状態をもたらさなければならないのです。

　アーシュラマとは、学びの場のことです。昔のインドでは、弟子たちは聖なる人物の周りに集まっていました。私たちはそのようなことをする必要はありません。むしろ、精神的な導き、方法、教えを中心に集まります。これは、人格を中心に集まるよりも良いことかもしれません。

　自分自身の中に正しい状態があれば、このようなアーシュラマにいることは本当に有益なことであり、逆に自分自身の力を加えることができるのです。アーシュラマで経験する平和は、平穏でも退屈でもありません。平和は、知性の熱心さと矛盾するものではありません。ラーシュラマは、先ほど申し上げたように、学習の場でもあります。学習には、受容性、注意深い知性、真理を見つけようとする熱意が必要です。ですから、アディヤールが真の意味での霊性の中心であり続けることを考えるならば、私たちは人生のより深い意味を発見しようとする探究心、真理への関心をアディヤールにもたらさなければなりません。私は、私たちの研究センターが熱心な学徒や探求者のために、特別な学習の中心地に成長することを望んでいます。しかし、このような熱心な精神は、教室の中だけのものではありません。各自が勉強や瞑想に必要な余暇を持ち、木陰や海辺に静かに座って内面に意識を向けるだけでなく、各自が与えられた仕事で自分の力を発揮しなければならないのです。

　インドも他の国々と同様、「近代的な知識」に侵されています。近代的な知識は、病気の撲滅や生活のしやすさなど、すばらしい成果をあげています。しかし、この知識は外向きのものです。心は常に疑問を外在化させるからです。アディヤールが再生（regeneration）の中心地となるためには、ここで働く私たち全員が、自分の内面から行動する能力を開花させなければなりません。つまり、内面に深く入り込むことを学ばなければならないのです。それはアーシュラマの生活の一部です。知性による探究と、内なる悟りのための探求は、バランスがとれていなければなりません。悟りという言葉はあまりにも多く使われすぎて、多くの人にとって意味を失っています。悟りとは、現実化するという意味です。何かについて話したり、推測したりすることができても、それが私たちにとって現実であることを意味するわけではありません。私たちは、愛情、協力、兄弟愛（同胞愛）について話すことができますが、私たちが実際に愛情、兄弟愛、協力を始めるまでは、それは私たちにとって現実のものではありません。ある性質が実現するということは、それが私たち自身の性質の一部となったということであり、そのような実現から行動すること、つまり、ある程度まで実現して行動することが、アーシュラマで生きることの一部なのです。

　100周年を祝うのはとても簡単なことです。個人的には、アディヤールの100周年に関連して「祝う」という言葉は好きではありません。しかし、再献身（rededication）の年、私たちの精神生活を強化する年、私たち自身のインスピレーションを新たにする年であれば、何らかの意味があるはずです。ここにはすでに多くのものがあります。それを活かして、さらに前進していきましょう。

　これらのことに言及したのは、アディヤールとは何か、何のためにあるのかを明確にする必要があると思うからです。私たちは、これらのことに対する責任感を十分に自覚しています。ここに住んでいる数少ない私たちは、ここを真の霊的中心地として維持する義務をますます意識するようになっています。